

中
勘
助

黒

幕

黒

幕

今年は先生がなくなってから二十年めになるので、「思想」の十一月号を漱石号にして、縁故のある人たちがそれぞれぞれなにか書くのだそうだ。今から楽しみだ。それは、余人はもとより先生自身も気づかれなかったことかもしれないが、先生が私にとってやはりなものかであったばかりでなく、執筆者の多くは程度の差こそあれ直接間接にその人を、またその人と先生との関係を私が知っている人だろうからである。話は私のところへもあった。原稿のメ切まで十日ばかりしかない。書くこととなると

悪くいえば、我儘一杯な私がいっになく即座にそれをひきうけて末席を汚すことになったのも、畢竟ひつきようその「なもの」のためである。——先生は生前には私の最も敬愛する人のひとりであり、その後は懐しい記憶のひとつなのである。

私は「末席を汚す」といった。これは私の柄にもない儀礼や謙遜ではない。私だけの感情は別として、先生と私の個人的関係は他の誰彼のそれにくらべるも末席が当然なほど短く且かつ浅かったからである。それはそうと昔あの和洋折衷の寺子屋めいた先生の部屋に集った弟子た

ちのみんなな立派に成長したことはどうだ。

よだれ涎くりなぞ

はとんと見当らない。いるとすればさしずめ私だが、私はいわば寺入りするかしないに師匠に別れたかたちで弟子といわれるほどのものではなく、首になってまで「でかしおった」の「けなげな奴」のといわれる段か、御迷惑はかけたが「お役にたった」ことはさらにない。

個人関係がそうばかりでなく学校での師弟の关系到於ても同様であった。一高の一年から大学の二年ごろ先生が辞職されるまで私はまあ直系の生徒、学生のひとりだったけれど、教わることを覚えようとしなのが悪い

学生ならば、私は疑いもなくいちばんというよりは唯一の悪い学生だったであろう。高等学校はともかくずっと自由な大学では、十八世紀の英文学史の講義のほうは、頭へさえ入れておけばいいと思うところは筆記をしなかつたし、自分に必要がないと思えば欠席したし、偶たまま筆記をするにしても頗すこぶる不熱心であつた。といつて私は決して講義そのものを軽視した訳ではない。ただそれがそのじぶん私の棲息していた世界とはまったく別の世界に属していたからである。私はシエクスピアのほうへは割合実直に出席した。

先生の作物に対しても私は愛読者ではないばかりかただの読者といわれる資格さえない。あれほど評判だった「猫」も全部読んでいないし、新聞小説を書かれるようになってからはまったく読まない。鶉籠うずらかごという創作集だけはどうしてか学生時代に面白く読んでその豊富が羨しかったことをおぼえている。近年俳句の選集をみて、私はつい知らなかったがなかなかいい句を作られたのだなと思った。先生の作品の価値については尊敬する友人たちの高い評価をそのまま認めてもいいだろうとは思う。とはいえ私には今にいたるまで御縁がないのである。

〔中略〕

それからこれは余技にすぎないが、先生の書画についても私はいっそう無関心であつたためひとのようになれこれとねだつたこともなく、見る機会も殆どほとんどもたなかつた。その後版にした記念帖など頂いてみるも素人芸ながら結構なものがあるらしい。先生はなんでもわかる明敏な頭と、やればなんでもできる器用な手の持主であつた。

そんな訳で私は学者としての先生にも芸術家としての先生にも御縁がなかつたものの、一個の人間、有徳の人

としての先生にはひそかに心をひかれていた。それを先生にはもとより友人にも多分漏らしたことはなく、また性来はにかみ屋の臆劫がりで引込思案のうえに、いったいに心酔的渴仰的態度をとり得ない私は、友人の誰彼のように特にこちらから親近することをしなかつたけれども。

私が大学を出た翌年、病後の保養のために小田原にある親戚の別荘へ厄介になつていた間に先生の最初の胃潰瘍がおこつた。私は電報で修善寺へお見舞を出した。その後先生がよほどいいということをきいて、野暮やぼではあ

るが美しく彩色した蝶形の麦藁細工むぎわらさいくの籠かごにいろんな色紙や千代紙でこしらえた折物、ちりちりなどを入れて送つたら、小宮の代筆かなにかで手紙がきて、鷺さぎ、ふくら雀、と目録を読みながら枕もとへ並べるところが書いてあった。先生はそれをみて

「このなかに中のこしらえたのは一つ二つしかないんだろう」

といわれたとか。いかにも私の作ったのは蓮花と鶴だけだったかもしれない。今でもそれつきりしか折りかたを知らないから。二十幾年前の気もちをはつきり呼びおこ

す由もないが、私は先生に対してよっほどいい感情をも
っていたにちがいない。単なるお義理でそんなことをす
る私ではないのだから。

先生のどこにいちばんひきつけられたか。この点では
私よりもずっと関係の深い、いわば直参とか愛弟子とか
いうべき人たちでも多分私とかわりはないであろう。学
識に対する信頼、作品に対する傾倒だけが私の見うける
ような風に人びとを先生に結びつけようとは思われな
い。そうして一個有徳の人間として敬愛されること、そ
れは先生が最も高い意味に於てみんなの「先生」だった

ことである。

先生と私の師弟としての関係は三十幾年前私が一高の一年の時からだ、個人的関係は大学を卒業後二、三年して「銀の匙」を書いた時から始まる。それは先生の御尽力で朝日新聞へのることになった。先生は私が不承不承にも原稿書きをしなけりばならなくなつた事情を人からきいて知つていられたのだらうと思ふ。なんだかよほど好意的、同情的に感じられた。誰に対しても親切だつたらしいが。その後ほかから新聞のほうでだいぶ迷惑らしい話もきいた。尤もなことだ。特に新聞というものの

性質上。それが掲載されたことも、中止されなかつたことも、紹介者、推薦者である先生のお蔭だつたらうと想像している。その後また後篇をかいた。その時は先生と朝日の関係も前とはちがつていたためによほど御迷惑らしい様子だつたのを、結局ずるずるべつたりにお願いして再度朝日へ載せてもらった。それを私は今でもたいへんすまなく思っている。先生にかけて御厄介がどの程度のものかは知らないけれど、私としては当時の事情が事情なり、今日までも深く恩義を感じているのである。間もなく先生がなくなつたので私は作品を見て頂く機会を

永久に失ってしまった。時たまつまらぬ著書を出すたんびにこのことを心淋しく残念に思う。

さて最後に表題の「黒幕」のことになる。先生は私と向いあつてるとまっ黒な幕が垂れてるようでいちばんいけないといわれたとかきいた。まっ黒な幕！ いかにもまっ黒な幕だ。それを私は特に先生にばかり用いた訳ではない。当時の境界きょうがいからして自然に世間、人間一般に對して用いさせられたのだが、しかし黒幕というあいにくと聯想が悪い。別の言葉でいえば舞台の暗転である。生憎先生は匆々席を去ってしまったわれたゆえ私の人間悲劇のその後

の進展を見ていたただくことができなかつたのは遺憾だが、爾来^{じらい}幾十年、いまだに舞台が廻りきららない不手際さだから、よしんば辛抱強く待っていてくださつたところで依然として暗転中である。それからこれは聊^{いささか}か枝葉末節にわたるが、先生と私の関係を内側で妙にこじらしてしまった最初の直接の原因は先生の髭にあったような気がする。教室で見た髭は柔く捲きあげられていたのに久びさではじめてお宅へ伺つた時には刈り込まれていた。それが先生の顔を尖鋭にし、私が想像していったのとは別の先生にしていた。尤も捲きあげ式は当時すたれ

ていたからその点先生を責めることはできないけれど。その感じのトガリが病的に鋭くなっていた私の神経にズキズキとこたえて、たっぷり持っていた懐しさの自然の流露を妨げてしまったらしい。将棋の最初の歩のつきかたひとつでその駒組み全体がかかわることがあるように、世間でもそんな些末事が意外の結果を惹き起すものである。

それはそうと先生の臨終の様子もまだまざまざと目に残っているのに、はやくも二十年が過ぎて、私たちの仲間がちょうど先生の年頃になった。先生を随分年寄だと

思っていたのだったが。存命なら古稀にも達していられるのである。また葡萄酒を飲み倒して今度はひとつ遠慮なく自作の小唄でもうたってきかそうものを。叱られるかな。

漱石号の舞台に立ってある人は渋い引幕をあけ、他の人は絢爛けんらんな緞帳どんちようをあげて、めいめい持ち味のある独白をきかせることであろう。冷かで私だけは黒幕だが、それもこう切って落してみれば別にかわったこともない敬愛と思慕の追善的一幕物なのである。

（『思想』漱石記念号、昭和十年十一月）

日本文学電子図書館

黒 幕

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館